妻が襲う

マキノ慧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
妻が襲う

【Ｎコード】
Ｎ４３６７Ｉ

【作者名】
マキノ慧

【あらすじ】
超売れっ子のホラー小説作家が突然の大スランプの襲われる。もともと霊感の強い妻と編集者のフォローに拠って起つところが多かったのだが、今回のスランプは深刻で、主人公はどんどん狂気に走っていく。見かねた編集者が休暇を勧め、別荘地に妻と２人で行く。それでも苦しみの中で立ち直りかけた時、今度は別荘地の森林に霊感を感じておかしくなっていく。そして、彼がある作品を書いた時に猟奇的な遊びに興じた女性が恨んでいると言い出す。そして、ついにある夜、その女に操られた妻が彼を襲う・・・

1

書けなくなった。

誰が見ても順風満帆の作家生活だったのが突然の大スランプに襲われた。デヴュー後三作目の途中から推敲するのに便利だと同業の先輩にすすめられてワープロで原稿を書いていたのを初心に帰る意志も篭めて手書きに替えてみたが効果があるどころか原稿用紙を眼にすること自体が苦痛に感じられた。それをワープロに慣れすぎたためと思い無理に原稿用紙に文字を埋めようと自らを強いた。それが事態を尚一層よくないものにしたのかもしれない。精神的に無理をしすぎたせいか原稿用紙の升目を見ただけで激烈な頭痛がするようになってしまった。それでまたワープロに切り替えたのだが悪くなった事態はもはや収拾のつかないまでになっていて一言なにか打つだけで吐き気をもよおす始末だった。

生まれて初めての経験だった。

人気のホラー作家として、ベストセラー作家として、僕は多作の部類で才能に限りない作家であると評価されていて自分でも書けなくなることなど想像すらもしたことがなかった。新人賞を受賞したデヴュー作を書いていた時にすでに書きたいアイデアが山ほどあって早く次の作品に取りかかりたくて焦る気持を抑えるのに苦労したほどだ。それはデヴュー後もずっと続いた。折からのホラー小説ブームと日本にホラー小説を書く作家が少なかったのと出版社の宣伝が上手かったことなどが重なって僕の作品はどれもこれも売れて注文も次から次へと限りなかった。作品のいくつかは映画化され僕はホラー小説の第一人者となり大有名人になり大金持ちになった。それでも作品のアイデアは尽きることなく講演やマスコミ対応などに時間をとられて執筆の時間が減れば減るほど書きたいという欲求が

募った。
　ああいうのがブームというのだろうと今になれば思う。今では僕にもかなりの固定ファンがついていて出版されれば僕の本はほかの作家の追随を許さぬ売上げを上げるのは間違いない。だが国中を騒がせたホラー作家『牧野慧』ブームは一先ず沈静したといっていいだろう。僕はブームで祭り上げられた作家から一流の人気作家へとステップアップしたのだ。もうこれまでのように読者の嗜好を気にしたり忘れられることを恐れて矢継ぎ早に新作を発表しなくてもよくなったのだ。
　これで寝食もままならぬような生活からも少しは解放され落ち着いて作品に取り組めるだろうと一息ついていた矢先のことだった。それまで書き続けていたある長編を書き終えた後それは僕に忍び寄っていた。自分のスランプに僕はすぐには気づかなかったのだ。
　思い返せば、その長編も佳境に入って筆が進まず最終章は執筆に通常の倍の時間を要した。その間に強引に依頼されて受けたエッセイの類の仕事が何本かあり次の長編の打ち合せを編集者とするまでに五日ほどかかった。普通なら三日で終える仕事量だった。そんな筆の重さも少し疲れているせいだと思っていた。そう思い込もうとしていたのかもしれない。自分がスランプに陥っていると認めたくなかっただけなのかもしれない。
　逃れようもなくそれを自覚したのは編集者との打ち合せの時だった。
　その編集者はデヴュー時からの担当で僕の創作作法について誰よりもよく理解してくれている。僕という人間についても。今でも僕が一番乗って取り組めるのは彼との仕事だ。実際、僕の作品中で最良のものは全て彼との仕事だ。僕という作家を真のプロとして育ててくれたのは彼だったし彼も僕の成功のおかげで出世した。
　その日、K出版の石津伸介と僕はあるシティホテルの一室で落ち合った。先に着いていた石津はビールの注がれたグラス片手にドアを開けてくれて僕の顔をみるなり「顔色がよくないな」といった。

部屋の隅に置かれたテーブルにむかい合って腰を降ろしながら僕は煙草に火を点けた。
「そうか。疲れてるのかな、やっぱり。エッセイ書くのに妙に手間取ったんでヘンだなと思ってたんだ。仕事のしすぎかな？」
「そうかもな」
「からだ壊してまで仕事することないよな。断ろうかな、お宅の長編」
「おいおい、それはないだろう。俺だって半年待ってたんだぜ」
「わかってるよ。冗談だよ。でもお前も、もう原稿待つような役職じゃないだろ。若いのに働かせてたらいいんじゃないのか」
「若いのを寄越しても原稿くれるのかよ」
「やるっていったら若いのを寄越すのか」
「かもな。俺ももう若いとはいえないし、お前とつき合うのは並大抵じゃないからな。でも今の地位につけたのもお前のおかげみたいなもんだから、お前の担当だけは間違って重役になったってやめるつもりはねぇよ。死ぬまで追っかけてやるから覚悟しとけ」
「あんまりぞっとしないな。とびきりの美人でも担当につけてくれたら、もっといい作品が書けるかもよ。お前がついてたら、作品の質は下がりっぱなしかもしれねぇぞ」
「そいつは困ったな。その件については社に持ち帰ってじっくり検討させてもらおう」
　そういって石津はグラスのビールを飲みながら、
「冗談はともかく、取り敢えず何か飲めよ。電話してやるよ。何にする？ウオッカでいいか」と僕に尋ねた。
「そうだな。コーヒーでも頼んでくれ」
　僕がそう応えると石津はゴクンと音をさせてビールを飲み込みグラスをテーブルに置いた。
「おい、どうしたんだ。本当に疲れてるのか？」
「そんなに驚くか？俺がコーヒー頼むと」
「何いってんだ。お前は一日中でもウォッカをストレートで飲んで

る男じゃねぇか」
「酒飲むと書けない気がして飲むのが恐いんだ」
「マジでいってんのか」
　石津の声の調子が急に強く重くなったことで僕は自分が何か心の奥底に溜まっていたことを吐露しているのだと半ば自覚した。しかし話はまだ軽口の続きなんだと思おうと努めた。
「え、俺、何かヘンなことといったかな？」
「いったよ。酒飲むと書けなくなるんじゃないかって」
「そんなことといったかな？」と尚も自らを偽ろうとする僕をたしなめるかの如く石津は穏やかだがハッキリとした口調でこういった。
「確かに、いった」
　その言葉が僕から重しのようなものを取り除いてくれた。僕は息急き切って石津にこう訴えていた。
「意識せずにいったんだけど、本心なんだ。なんだか不安でしょうがないんだ。この先、俺はもう小説が書けないんじゃないかって」
　僕の言葉は最後の方は興奮のために上擦っていたと思う。そしてそんな自分が幼く恥ずかしく感じられて俯いてしまった。石津は僕の顔を覗き込むようにしてこんな慰めをいってくれた。
「そんなことないさ。お前は天才なんだから。お前は日本一のホラー作家なんだぜ。ちょっと疲れてるだけだよ。今、コーヒー頼んでやるから、まぁ落ち着け。今日は打ち合せはやめよう。原稿は急がないんだから。締切なんか俺がいつまでも延ばしてるからさ。待たせられるんだから、もうそういう立場なんだから、今のお前は」
　仕事関係のつき合いの中で唯一甘えられる存在の石津を前にして僕は萎え切ってしまった。石津は弱々しくコーヒーを啜っている僕に何度も労わりの言葉をかけて肩を強く握ってくれた。しかし石津が励ましてくれればくれるほど僕の気持ちは益々萎えていった。
　作家という特殊に個人的な仕事を始めて売れっ子作家として仕事を捌く生活の中で僕が本当に心をゆるせたのは妻の真理子と石津の二人だけだったのかもしれない。売れっ子と評される前からつき合

いのある編集者は石津だけだった。石津以外の編集者たちは売れっ子作家の僕に近づいてきたのだ。僕の原稿が欲しいばかりに。僕のことを少しでも思いやってくれたりはしない。自身と自身の会社の利益のことしか考えていない。そのためだけに僕に愛想笑いをし何度も頭を下げているにすぎない。僕から何かをむしり取ろうとする連中ばかりが僕の周りに群がっていた。テレヴィ局や新聞社や週刊誌の人間もそうだしファンだといって追っかけてくる若い女もそうだった。誰もが僕からむしり取ることしか考えず僕に何かを与えようとする人間は一人もいなかった。真理子と石津以外には。僕のことを本気で考えてくれるのはその二人だけだった。ずっとそう感じていたのだが胸の中で「そんなことはない」と否定し続けることで自身を鼓舞してきたのが石津を前にして一気に崩れた。

石津が優しくしてくれればくれるほど一度堰を切った水はとどまることを知らず僕は何かに怯える子供のように背を丸めて小さくなり身体を震わせた。

いつもなら石津との打ち合せは泊りが決まりで二、三日帰らないことも珍しくないのに出かけて二時間ほどで帰宅したことと僕の顔色が悪かったことが妻の真理子に「何かあったの？」といわせたようだ。

僕は妻のその質問には応えずに彼女の胸に顔を埋めて泣いてしまった。妻は困ったような声で「どうしたの。石津さんと喧嘩でもしたの」といいながら僕の背中を擦ってくれる。

しゃくりあげながら僕は激しく何度も頭を振った。

「じゃあ何があったの？」

「何もない」

そういった僕の声は彼女の胸に遮られてこもっていたのだが妻には通じたようだった。

妻には霊感があるのだ。

真顔でそういうと他人は僕が妻のことを悪くいってるのか良くい

ってるのかはよくわからないが自分にとって特別の存在だということをジョークに包んでいっているのだと勝手に判断しているようで微笑みながら頷くのだが真理子は正真正銘の霊能力者で子供の頃から何度も幽霊を目撃しているのだ。

ホラー作家がこんなことをいうとまずいかもしれないが霊感が強いということがどんな風なのか正直いって僕には見当すらつかない。旅行に出かけてホテルの部屋に入るなり時々この部屋には自殺した人の霊がいるから部屋を替えて欲しいなどということがあるからかなり嫌なことのように思えるのだが幽霊を見ることそれ自体は別に彼女にとって嫌なことでもなく恐くもないようで「幽霊でも良い幽霊ならかえって楽しいくらいなんだけど悪い幽霊の時は嫌だし恐いのよ。人間でも悪い奴と一緒にいるのは嫌でしょ」ということらしい。

彼女とは学生時代にホラー小説愛好家のサークルで知り合った。同じ大学の同級生だった。僕たちは大学を卒業して僕が勤め始めてすぐに結婚した。卒業前に結婚を決めていたので彼女は就職しなかった。

彼女が僕を選んだ理由がまたふるっていて「霊波が合うから」だということだった。彼女がそういった時おそらく僕は困惑したような表情をしていたのだろう。こんな風に彼女が説明したのを覚えている。「霊波っていう言葉自体があまり一般性がないので奇異に聞こえるかもしれないけど仲の良い人同志って大抵霊波が合ってるものなの。気持ちが一緒になれたりするのは霊波が合ってる証拠なのよ」と。そういわれてみれば僕にも彼女の考えていることが彼女が口に出してそうとはいわなくてもわかることがよくある。それは彼女以外の人以上に彼女に関してそうだともいえる。そんなことを彼女流に表現したのが先の説明であると僕は理解した。

サークルでは彼女も自作のホラー小説を書いていたのだが結婚を機にそれを全くやめてしまった。もともと私には筆力もないし長編小説を書く体力もないからといって。あわせて彼女は僕にこういっ

た。あなたにはその両方があるから是非あなたは小説を書き続けて欲しいと。

正直なところ彼女が学生時代に書いていた小説は完成度が低く論理的整合性を欠いたものがほとんどだった。しかし迫力という点だけで評価すれば群を抜いていた。これ以上ないほどの邪悪な幽霊が登場する心底ぞっとさせられる作品ばかりだった。そのハイライトシーンの描写の濃密さは作品の完成度を忘れさせることもあるくらいだった。彼女の言によると霊感によって実際に感じた邪悪な霊のあまりの霊力の強さを自身の内にため込んでおけなくて吐き出しただけにすぎないということらしいがそのリアルさは誰にでも真似のできることではない。だから僕は執拗に彼女に書き続けることを勧めた。筆力や構成力は書いているうちについてくるはずだからといって。しかし彼女の決意は堅く「あたしは自分が作品を書くよりも、あなたが素晴らしい作品を書くための手助けがしたいの」といって取り合わなかった。

そして現に公募で新人賞を取った作品でもそれをきっかけにプロになってからも僕は妻の示唆を受け続けている。彼女のアドヴァイスに従って作品に登場させる幽霊をより邪悪にできたために僕の作品は認められ売れたのだといっても謙遜とはいえない。作品の大元のアイデアだって彼女の霊感に負わないものは一つもないといってもいいかもしれない。当の僕自身がこれほどに作家として彼女の協力を意識しているのだから気づかぬうちに受けている影響は計り知れないものだろう。そうでなくても元々霊波が合って何も語らずともお互いの考えていることがわかり合えるほどなのだから。そしておそらく霊感の強い彼女の方がそういう能力とは縁のない僕よりも僕の考えをより理解し僕の心に侵入し得たはずだから。

作家として自身で彼女の霊感の恩恵を強く認めるにもかかわらず僕は彼女の霊感がある時期疎ましくてたまらなかったことがあった。自分の心の内が全て彼女に見透かされているように感じられて疎ましいというよりも恐れていたという方が近いかもしれない。僕が売

れっ子作家になりつつある時期から押しも押されもせぬ売れっ子作家になりテレヴィや雑誌にも度々登場するようになった頃のことだ。僕の本はその頃まだ僕を見出だしたK出版が独占的に出版していて僕のマネージメントも石津がしていた。僕はその頃どこに行くのも何をするのも石津と一緒だった。

誰が見ても僕は有頂天になっていた。

どこへ行っても誰からもチヤホヤされたし女にも急にもてるようになった。僕の行くところに女が着いてきたといえた。僕は最初そのことに戸惑ったが束の間のことですぐにそんな常態を享受しようとした。その邪魔を石津がした。女なら絶対に安全なのを俺が調達するから、あの手の女を相手にするなといって。石津のガードはそのきつい言葉以上の厳しいものだった。それでも幾度かは石津の眼をごまかして遊びはしたのだが石津のいった通り有名人好きの女ばかりで何の魂胆もない女には出会わなかったばかりか関係を清算するのにも苦労した。そんなことも石津の監視がきついせいに思えてついには「それほどいうなら、お前が女を用意しろ」といってしまった。

石津が調達してきた女は僕にまとわりついてきた女たちより見た目にもずっといい女が多く僕は石津の言に従ったことが間違いではなかったことを悟らされた。しかも石津は毎回違うタイプの美人を連れてきたし同じ女を二度連れてきたことはなかった。かなりの期間、僕は石津の調達してくれる女とのセックスに興じた。仕事はその間ずっとさぼっていた。仕事より女と遊ぶ方がずっと楽しいのだから。しかしそんな遊びにも飽きがくる。僕が飽きてきているのがわかったのか石津はある提案を僕にした。それは次作のためにもなるといって。

僕の次作は監禁された女が出てくる話で、この作品もそのヒントは妻の真理子からのものだ。監禁された女が語りかけてくると、ある日突然、真理子が語り始めたのだ。その内容を僕はメモして、それを元に小説の下ノートを作って石津に渡してあった。石津は催眠

術か何かで肉体の自由だけを奪って監禁することにしたら精神的な苦痛がうまく表現できておもしろいかもしれないといって催眠術や心理学の資料を揃えてくれた。いつからともなく石津は僕の資料係も勤めてくれるようになっていた。その作品の執筆が女遊びのためにとまっていたためにそんなことをいい出したのかもしれない。

「女に催眠術をかけて監禁してみないか」

その石津の提案に僕は正直いって少しびびったのだが興味津々だったことは否定できない。

「そんなことして大丈夫なのか？」

僕は恐る恐る石津にそう尋ねた。

「何が？」

「何がって、スキャンダルに巻き込まれたりしないのか」

「俺がそんなヘマをやらかすわけないだろ。お前みたいに無防備にバカな有名人好きの女と遊ぶ方がよっぽど危ねぇんだよ」

「ほんとに大丈夫なのか」

「俺を信じろ」

「でも、催眠術なんて誰がかけるんだ？」

「俺がかけるさ」

「お前、催眠術なんてできるのか？」

「あのなぁ、俺の仕事は何だかわかってんのか。お前の原稿を持って帰ることなんだぜ。どうもお前はそこらへんの現実認識が足らねぇから困るんだ。こないだ催眠術関係の資料を渡したろ。当然、俺は全部自分で目を通したし、実際にどんなものかかけてももらったし、かけ方も教わってるんだよ。お前が書いててわからない部分が出てきたら、できる限り答えられるように準備してんだよ。お前の原稿を持って帰るためだったら俺は何でもするし、社からもそれなりの金を使ってもいいといわれてるんだよ。お前の作品を出版すると、うちの社がどれくらい儲かるか、お前の収入を見てもわかるだろ」

「K出版が全面的に後援する遊びってわけだな」

「そう思ってくれていい」
石津の力強い断言を聞いて僕は安心し益々その気になった。
スキャンダルの心配はなくなったが今一つ不安なことがあった。この刺激的な遊びのことを真理子に感づかれるんじゃないかという恐れだ。それまでの女遊びも打ち合せだと真理子にはいっていたが嘘だとばれているような気がして不安でならなかった。真理子が少しもそんな素振りを見せないのが僕をいつも不安にさせる。彼女の霊感を前にして僕の嘘など通じるはずがないと。そのうえ今度の監禁遊びでは一週間ほど家を空けることになる。これまでのように一晩二晩ではない。打ち合せというだけでは不自然だ。何か特別の打ち合せということにしなければならない。いつもより込み入った嘘をいつもより上手につかなければならない。しかもその日のことを想像していつもより興奮している状態で。
僕にはそれをうまくやり通す自信など持てそうになかった。彼女の霊感に対する畏怖は他人には理解してもらえないだろうが。とはいえ監禁遊びに対する興味を捨てることもできなかった。
僕は真理子に嘘をつく役目も石津に依頼した。石津は何度も家に来たことがあり真理子とも打ち解けた関係になっていたし僕を一流作家に育ててくれた恩人として彼女は石津を信頼してもいたから。真理子も石津のいうことなら疑わないのではないかと思ったのだ。
石津は快く引き受けてくれたように見えた。
「ただし」と石津は言葉を接いだ。
「俺だけを悪者にするのはゴメンだぜ」
「どういう意味だ？」
「俺のつく嘘にお前も合わせること。絶対に奥さんに嘘だとばらしてしまわないこと」
「ば、ばらすかよ、こんなこと」
「誓えるか？」
「誓えるよ。ばらすわけないだろ」
「俺とお前だけの秘密だぞ。ほかの誰にも話すなよ」

「いったい誰に話すっていうんだよ、こんなこと」
「日本国中にむかってなら話してもいいんだぜ」
「どういう意味だ」
「その体験を作品にするんならいいってことだ」
「作品を書き始めるのが、この遊びを手引きする条件ってわけか」
「ただでこんな遊びができるって思うほどお前も世間知らずじゃねぇだろう。嫌だったらやめてもいいんだぜ。犯罪まがいの遊びの手引きなんて俺だってできることならやりたかねぇや。お前がしらけないようにトウシロの女まで用意してるんだから。下手すりゃ手が後に回っちまいかねない」
「わかってるよ。やめるなんていってないだろ」
「約束だぜ。俺のいうことを聞いてりゃ悪いようにはしないって」
「じゃあ真理子にはうまくいってくれよ」
「そうだな。お前があんまり仕事にかからねぇから罐詰にするってことにでもするか」
「そんなのでうまく騙せるかな。俺、今まで一度も罐詰にされたことないし」
「だから不機嫌そうに家を出てこれるじゃねぇーか。それに実際にお前はある種の罐詰になるんだしよ」
「それもそうだな」
「だけど、どっちにしたって終わって帰った時には自分で嘘をつかなきゃなんねぇぞ」
「そ、そうだな。大丈夫かな」
「苦痛が少なくてすむ方法が一つある」
「なんだ、それは」
「帰ったらすぐ、罐詰になったおかげで仕事がのってきたからといって本当に作品を書き始めることだ。お前は集中的に書くタイプだろうが」
「悔しいけど名案だな」

電話の呼び出し音が聞こえた時には心底ドキリとした。心臓は口から飛び出しそうなほど波打っていた。仕事部屋のドアを少し開けて電話に出た妻の声に聞耳をたてた。
妻は機械的な受け答えをしていた。感情的な様子はうかがえなかった。妻の「お待ち下さい」という声が聞こえたところで僕はそっとドアを閉め仕事机に戻った。すぐに廊下に妻の足音が響いてドアがノックされた。
僕の返事と同時に真理子がドアを開けて、
「石津さんからお電話よ。作品の進捗状況が悪いから一週間ほどホテルに罐詰になってもらうっておっしゃってるわよ」と早口にいった。
「罐詰だって」
彼女の方に顔をむけながら不快そうに聞こえるように努めて僕はそういった。
「あら、知らなかったの？」
と彼女が怪訝そうにいったので慌てて、
「聞いたかもしれないけど冗談かと思ってたんだ」と僕はもう馬脚を現しそうになる。
「じゃあ、聞いてたのね」
「え、ああ、どうかな。よく覚えてないな、そんなこと」
もうそれ以上、彼女とまともに応対する自信がなかったので僕は電話の置かれている場所にむかって妻を押し退けるように仕事部屋を出た。
受話器を手に取るや真理子に聞こえるように僕は常ならぬ大きな声で話し始めた。
「罐詰っていうのはどういうことだ。まさか本気だったなんて思ってもみなかったよ」
電話のむこうで石津はクスクス笑いながらこんなことをいっている。
「ちゃんと嘘がつけるじゃねぇか。さすがにプロの小説家だけのこ

とはある」
「うるさいんだよ。俺のことが信じられないっていうのか」
「信じた妻がバカを見るってか」
「俺が今までに一度でもお前を裏切ったことがあるか」
「そんなこと奥さんに胸張っていえるのか」
「そうか、わかったよ。それほど俺のことが信用できないんなら、お前のいう通りにしてやるさ」
「お前の方がそうしたいんだろうが」
「しかしいっとくぞ。これが最後だからな。今度こんなことがあったら、もう二度とお前んとこの仕事は受けないからな」
「俺だっていわせてもらうぜ。これが最後だからな。もう二度とこんな遊びはゴメンだからな」
そこで僕は力一杯大きな音がするように電話を切った。そして怒り心頭に達したかのようにわざとドタドタと足音をたてて仕事部屋に戻った。途中で真理子とすれ違った時には「あの野郎なめやがって」と彼女に聞こえるように一人ごち部屋に入るや思い切り力をこめてドアを閉じた。そしてベッドに潜り込んで布団に頭からくるまってほくそ笑んだ。うまくいったと思った。

翌日いつものように正午頃に起きると妻は一週間分の下着などの着替えをバッグに詰めてくれていた。僕は不機嫌そうに見えるように努めながらコーヒーをいつものように二杯飲んで「この次にこんなことがあったら、もう二度とK出版の仕事は受けないから」と捨て台詞を残して家を出た。
それから一週間、僕は幻想的といってもいい遊びに耽った。こんな快楽はもう二度と経験できないだろうと思った。
催眠術をかけられた女は僕のいうことを何でも聞いた。猟奇的なと形容できるセックスを嫌になるまで繰り返した。女を殴り蹴り縛り上げ蝋燭や鞭で責め苦痛の表情を楽しみ思いつく限りのあらゆるものを女の局部に挿入した。僕が疲れると石津が僕と代わった。石

津が女をいたぶっている様を僕はノートに描写した。石津は僕により一層の刺激を与えようと必要以上に女に残酷に振る舞った。

この実体験の描写を最大限に取り入れたのが僕の第六作の最も売れた作品『監禁』だ。この作品は映画化されたのだが、どう作っても成人指定を外せないことが逆に話題になりホラー作家、牧野慧の大ブームの引き金となった。

うっかりしていると書けない原因が自身の才能が渇れたせいに思われてくる。無理にでもほかの原因を見つけたくなってしまう。それを僕は毎日の生活のどこかに書けていた時と比べて違うところがあるせいだと思い込もうとした。その結果、些細な生活習慣の変化が仕事を滞らせていると信じて疑わなくなってしまった。変化したところを見つけるために僕は毎日の生活をそれこそ秒刻みにチェックし始めた。一番の変化がそんなチェックをしていることだとは気づかずに。

目覚めは正午前後。この前後というのが気に入らない。十一時五十七分くらいには目覚めていたはずだと思えて仕方がない。なぜかというと目覚めの一服を吸い終わる頃、近くの小学校の正午のサイレンを聞いていたはずだという気がするからだ。目覚まし時計で起きるのではないのに分単位まで同じ時刻に目が覚める方が珍しい。だから本当は目が覚めてから正午のサイレンを聞いたこともあるし正午のサイレンで目覚めたこともあるし目覚めた時には正午のサイレンはすでに鳴り終わっていたこともあるはずなのだ。ところが僕はそんな風に考えられなくなってしまっていたのだ。

僕の神経は病的といっていいほど些細なことにまで注意を傾けた。たとえば目覚めのあと必ず二杯は飲むコーヒーの濃さやトーストの焼き具合、トーストに塗るバターの量、茹卵の茹で具合、茹卵にかける塩の量などまでが気にかかってしょうがなかった。気になるだけならいいのだが少しでも書けていた頃と違うと感じるとコーヒーカップやらバターナイフやら目の前にあるものをあたりかまわず投

げつけずにはいられない有様だった。
朝昼兼用の食事のあとの午後の時間は主に参考資料に目を通したりする読書の時間にあてているのだが、それが全く捗らない。活字を見るのも嫌なのに、自身でそのことに気づいているくせに、それを認めたくないので頑なに本を広げて拷問に耐えるように仕事机にへばりついている。額に脂汗を滲ませながら。三時きっかりのティータイムまでが一日の苦しみの最初のタームだ。コーヒーを運んできた妻が仕事部屋のドアをノックする音が聞こえるや否やすぐに本を閉じ少しでも自分のそばから離れて欲しいもののように本を仕事机の奥の方に投げ出し自分の身体はその逆の方向へ椅子ごと引いて荒い息に胸を上下させる。
真理子は一言も話さずに素早くコーヒーを仕事机に置いて逃げるように仕事部屋を出る。
僕がこんな風になった当初、彼女は僕の状態をまだ甘く見ていて慰めのような言葉をかけたためにひどい目に合った。その言葉をきっかけに僕は難癖をつけ出して大暴れしたのだった。この状態が疲労のせいだと考えていた彼女はコーヒーに睡眠薬を混ぜて僕を眠らせてしまったこともあった。その時も夜遅くに目覚めた僕は生活のリズムを故意に狂わせた妻にむかって荒れ狂った。
夕食時には本格的に飲むせいで少し落ち着く場合もある。反面、酔いのせいで最も悪い状態に陥るのもこの時だ。その時、自分がどうなっているのかは知らない。意識をなくしてしまっているから。我に帰った時の家内の様子と真理子の姿を見ると、その暴れようのひどさが簡単に想像できる。家の中は傷つかぬものがないほど荒れ真理子の顔は重病人のように青ざめている。紫色の痣とどす黒い血の色が彼女の顔色をさらに悪く見せている。
夜は執筆の時間だ。
僕は午後の読書タイム以上の苦しみを味わう。時計はすぐに粉々に破壊した。ワープロも何台も壊した。部屋中に破かれた紙と灰皿からこぼれ落ちた煙草の吸い殻とウォッカの壜が散らばっている。

何故か蛍光灯が疎ましく感じられてウォッカの入ったグラスをぶつけては電気がウォッカを浴びてショートし火花を散らすのに怯えた。仕事机に自分の頭を叩きつけすぎて額は腫れあがりシャツには血の染みがついているが痛みを感じる余裕もない。

明け方が待遠しかった。

新聞配達の単車のエンジン音とクラッチを切り替える音が一日のうちで僕を一番安らかな気持にさせた。本と同様に全く読めないのだが、いそいそと玄関まで行きポストから新聞を取り出して大きく息をつく。朝刊が来ると執筆を終えるのが僕の習慣なのだ。読めはしないのだが最初に来た新聞をやみくもにめくっているうちに次の新聞が来る。五紙取っている新聞の最後の配達がくるまでの間は落ち着いていられる。最後の新聞さえめくり終わったら睡眠の時間を迎える習慣だからだ。

二ヵ月ほどそんな生活を続けた後のことだったと思う。

目覚めたら十二時四分だった。正午のサイレンを僕は聞き逃した。それだけで僕の心臓の鼓動は高くなる。忌々しさが鼓動の高まりに合わせて募っていく。何とか我慢して煙草に火を点けるが二、三服してすぐに消してしまう。習慣を守ろうとする者は一つでもそれができないと不快なものだ。ましてや目覚めた時点で、その日の最初から、その日の習慣がすでにして守られなかった時、その不快さは最も高い。しかもその時の僕は習慣を守ることだけに努める生活をしていたのだから。目覚めた時点で今日の生活は全部おじゃんだと感じながらも、それでもその後も習慣を守らねばならないという使命感が僕をダイニングキッチンへとむかわせる。

キッチンで僕の食事を用意していた真理子は入ってきた僕をチラッと見ただけですぐに目を逸らした。真理子はもう彼女の方からは僕に話しかけてはこない。僕から話しかけてやっと少し返事をするくらいだ。この二ヵ月の間に自分から話しかけたせいで何度も僕を暴れさせたからだ。

ダイニングテーブルの上には、いつものようにトーストされた食パンが二枚皿に乗せられている。その日のトーストはいつもより焼きすぎているように僕には見える。椅子にかけることもせずに僕はテーブルの上のトーストを見つめている。妻はそんな僕の様子に怯えながらもいれたてのコーヒーをトーストの皿の横に置いたが恐いもののそばから離れるようにテーブルからさっと身を引いた。

「ど、どうしたの。何か気に入らない？」と彼女は小さな声でいいながら少しずつ後退りしていく。僕は彼女の顔を睨みつけながら、こう答える。

「トーストの焼き具合がいつもと違う。焼きすぎだ」

「そ、そんなことないわ。いつもと同じ時間しか焼いてないわ。タイマーなんだから間違いないわ」

真理子の顔には僕の乱暴でてきた痣が何ヵ所もあり、この二ヵ月の心労によって肌も荒れ頬も痩けている。そんな妻の姿そのものが疎ましく、またそんな妻が怯えれば怯えるほど益々僕は苛立ってくる。息を荒げながら僕は少しずつ妻に近づいていく。いつのまにか右手にはフルーツナイフが強く握られている。腕の筋肉は痙攣を起こしそうなくらい硬く張っている。

「お願い。あなた、やめて」

弱々しくそういいながら妻は後退りを続け、ついにはキッチンの壁につきあたってしまい、そこで嫌々をするかのようにうずくまってしまう。震えながら許しを請うている妻を見て僕の苛立ちは最高潮に達した。憎らしさだけが先に立ち、もう前後の見境もつかない状態になっていた。妻の顔をめがけて降り下ろすために僕はフルーツナイフを握った右手を振り上げた。振り上げるのに合わせて大きく息を吸い、吸い込むことによって苛立ちの全てを右手に集中させた。大きく振りかぶって息を止めた僕の身体は弓なりになっている。

歯も軋むほど強く噛みしめられている。息を吐くのに合わせてフルーツナイフが降り下ろされる。妻が叫び声を上げる。

その瞬間、僕は誰かに右手を強く掴まれた。

僕は振り返った。
石津がいた。
真理子はその隙に僕の前から逃げ出して石津の背後に身を隠した。
「落ち着け」
石津は穏やかに繰り返しそういいながら僕の右手を捻り上げてフルーツナイフを奪った。何とか抵抗しようとしたが、その度に更に腕を捻られて、ついに僕は諦めた。諦めると徐々に落ち着きを取り戻してきた。奪い取られて石津の手の中にあるフルーツナイフを見つめて自分が情けなくなり涙が出てきた。僕は何ということをしようとしたのか。もう正常な人間とはいえないじゃないか。僕が泣きだすと石津は手を離してくれた。真理子はそれでも暫らくは石津の背中の後から離れなかった。
この二ヵ月の間、心配して何度も石津は電話をくれていた。僕はその度に「大丈夫だ。段々くなってきている」と応えていた。なのに石津がやってきた。真理子がたまりかねて相談していたのだ。真理子は自身の辛さとともに、また身の危険を感じてのこともあるのだろう、僕のあまりの憔悴ぶりを石津に訴えたらしかった。
「少し環境を変えてみたらどうだ」と石津はいった。
「何度もいったが、お前の作品は待たれてるんだから、無理しなくていいんだから。書くことは忘れて、静かな空気のいいところへでも行って、のんびりしてこいよ」
僕は表面上かなり反抗した。そんなことまでしなくても自分の力で立ち直ってみせると虚勢を張った。だが心の中では石津のいうことを聞こうと決めていた。フルーツナイフを振り上げるなんて尋常ではない。このままの生活を続けていて立ち直れるなんて思えなかった。
石津は僕のそんな反応を予想していたようで、とあるあまり人に知られていない別荘地に家をすでに借りてくれていて、その家の鍵を見せて「もう借りちまったんだ」といって僕が承諾しやすくしてくれた。そのうえ石津は出発の準備を手伝い明日は見送るといって、

本当は僕の落ち着き具合を確認するためだったのだろう、その日はわが家に泊まった。
真理子と石津は、この『僕の静養』、いや『僕の治療』について夜遅くまで打ち合せをしていた。
もともと貸し別荘なので家具や生活用品は備えつけられているらしいので身の回りのものだけを車のトランクに積み込んで、翌朝、僕は真理子と二人でその別荘地にむかった。
前夜の打ち合せでは足りないと思ったのか出発の直前まで真理子はしきりに石津と話し込んでいた。僕が車を発進させてからも手を振る石津の姿が完全に見えなくなるまで後をむいたままだった。
この『別荘行き』は真理子にとってそれほど不安なことだったのだろう。前日フルーツナイフを振り上げた男と二人きりになるのだから無理もない。別荘地に行ってしまえば石津に助けてもらうこともできない。彼女が怯え不安になるのも無理もない。
それに真理子はもともと自然の中で暮らすのがあまり好きではない。嫌いだといっていいほどだ。特に山の中は短期間の旅行ででも行きたがらない。山の中は霊気が強いらしく落ち着けないのだそうだ。それでも『僕の治療』のために、むしろ進んで別荘地に同行してくれる真理子の大いなる愛に僕は感謝してもし尽くせないという思いを胸に刻みつつ、何としても立ち直ろうと決意した。

2

久しぶりに清々しい気分だった。
標高が高いために初夏といっていい季節にもかかわらず朝晩はまだ寒いくらいだったが、それが気分を引き締めてくれる。冬はスキーも楽しめるらしいこの別荘地は温泉も出るのに観光地としては知られていないようで「閑静な」という形容がピッタリの別荘地だった。まだ夏休みをとるのには早すぎるせいだろう、あたりのほかの

別荘には誰もいず、もともと人の住めないような場所を切り開いて別荘地にしたようで地元の人の住居もない。麓の町までは車で四十分ほどかかり、その不便さえ辛抱すれば休養するには最適のロケーションといえた。

ここに来た日から生活の一新を誓った。これまでのような夜型の生活を改めようと決意した。夜型の生活そのものが僕に仕事を思い出させると思ったからだ。夜型の生活から完全に抜け切るのに二週間ほどかかった。その二週間は僕にとってだけではなく真理子にとっても辛い期間だったと思う。僕は、ここに来てからはどんなに辛くても真理子にだけはあたらないように努めた。こんなところまでついて来てくれる妻にだけは何としてもあたるまいと自身にいい聞かせ続けた。自分一人で苦しみに立ちむかい暴れずにはいられなくなると夜中でも外に飛び出して森の中で叫び声を上げた。そんな僕と二人きりでいて真理子は家にいた時とはまた別の苦痛を味わっていたのだろうと思う。ここに来て以来、毎日かかってくる石津からの電話を待ちわび、僕の様子があまりにひどい時には自分から電話をかけて、長い間、僕には聞こえないように配慮してか小声で石津と話し込んでいた。時には石津から直接元気づけさせるために受話器を僕に手渡した。石津はいつも「お前の作品は待たれているんだから。一年でも二年でもかまわないから休暇だと思ってのんびりしろ」と僕にいった。僕と石津が話している間、真理子はいつも何かにすがるような表情で僕を見つめていた。

そんな真理子と石津の励ましのおかげもあって僕は徐々に仕事のことも忘れて夜型の生活から脱却していった。今では、この溢れるような日中の日差しを存分に浴びることでエネルギーが蓄積されるように思え緑の木々からも谷川のせせらぎからも鳥の鳴き声からも恵みを感じられるようにまでなった。真理子はそんな僕の様子を見て心底ほっとしたようだった。

ある朝、真理子を散歩に誘った。

ここに来て二週間、夜中に飛び出す以外は別荘にずっと閉じこも

っていた。真理子もその間、僕から目を離せないので本当は食材の買い出しが必要だったのだが石津に頼んで届けさせていた。そんな訳で僕たちはこの別荘の周辺のことを全くといっていいほど知らなかった。

別荘の周囲に広がる森の中、木々の間をのんびりと十分ほど歩くと大きな池に出くわした。森に囲まれているせいで池は水面を風に直接さらされることがなくシンとしている。鳥のチチ、チチと鳴く声と池に水を送り込む小川のせせらぎの音のほかには何も聞こえない。池の縁に沿って歩き続けると池に辿り着いたのと同じような小道があったので、その道を森の中に歩み入る。あまりの静けさのためお互いの呼吸する音がよく聞こえる。真理子の息が荒いのは歩き疲れたせいだとばかり思っていた。

突然、ガサガサッと音がして大きな黒い鳥が飛び立った。黒い、真っ黒なカラスだった。

真理子は僕の腕にすがり着いて震えていた。

「どうしたんだ。気分でも悪いのかい」

妻の顔色が真っ青なのに気づいた僕はそう聞いた。

「早く戻りましょう。ここは呪縛霊が漂っている場所みたい。気味の悪い霊波があたしとコンタクトしようとしてくるの。吠えるような呻き声で」

自分の苦しさのあまり真理子のことを思いやることに僕は疎かでありすぎたと気づいた。真理子も僕を心配するのに精一杯で普段なら感じる霊気に対して鈍感になっていたのかもしれない。僕の回復の兆しが彼女を安心させ本来の状態に戻ったために彼女は霊気を感じ始めたのだ。

僕たちは急ぎ足で別荘に戻った。

別荘に戻っても彼女の顔色は真っ青なままで時間がたてばたつほど悪くなってくるように見えた。

それ以後、真理子は無理に用事を作っては毎日のように車を飛ば

して麓の町に下りるようになった。僕はそのことをどうこういう立場ではない。嫌いであるにもかかわらず僕のためにこんなところまでついてきてくれた彼女に感謝こそするが意見しようなどという気は全く起きなかった。僕にはもう少し時間が必要だったから。彼女が麓の町に下りることによって少しでも気分転換になるのなら、むしろそうしてくれる方が僕の気も安まった。

日に日に真理子が麓の町にいる時間が長くなり僕は彼女の苦痛をひしひしと感じ少しでも早くスランプから脱したいと願った。

朝の森の中の散歩は僕の日課となっていて、その日も前日に何か買い忘れたといって真理子が車で出かけるのを見送ったあと一人で例の池にむかって歩いた。

山の天気は変わりやすいと知識としては聞いたことがあったが実際に体験したことはなかった。これまでの二週間、穏やかな天気が続いていたから。だから、ついさっきまであれほど青々としていた空が池の縁に近づくまでの十分ほどの間にどんよりと曇ってしまったからといって別に気になりはしなかった。

しかし雨がポツポツと降り始め空の遠くで時々光るものさえ見え出したので僕は急ぎ足で別荘に帰った。別荘に着く頃には小粒だった雨も大粒になり吹き出した風に舞っていた。あたりは夕闇が迫ったかのごとくどんどん暗くなっていく。

玄関先のポストに何か投函されているのに気づき、それを取り出して家内に入った。途端に空がピカリと光り大きな雷の音が一つ、ほんの近くに何かが落ちたかのように響いた。

郵便物は封書だった。宛名は僕になっていた。

差出人の女の名前に覚えはなかった。玄関先で僕は怪訝な気持ちで封書を開いた。

予期せぬこの手紙を、あなたは怪訝そうに開いたのではないでしょうか。おそらくあなたは、あたしの名前すら覚えていらっしゃらないでしょう。あたしはあなたのことをよく知っています。あなた

の色んなことを。あなたが異常な人格の人だということを。
これで思い出したかしら。まだ、あたしのことを思い出さないなら、あなたの異常さは本当に大したものだわ。
あなたは、いいえ、あなたたち。あなたと石津って男は、あたしをオモチャにして遊んだのよ。あたしに催眠術をかけて、あたしを監禁して、あたしの心を支配して、あたしの身体で、子供のように遊んだのよ。あたしの身体を玩んだのよ。その上、それで、あなたたちはお金儲けすらした。特に、あなたが。
おかげで、あたしの身体は使いものにならなくなったわ。あなたは、その報いを受けなくちゃならない。
あたしは、あなたに復讐するのよ。
あなたの奥さんの心を、あたしが支配するわ。あなたを苦しめるために。あなたの奥さんの心は、あたしに監禁されて、その苦しみから逃れるために、あなたを襲うの。
あなたは決して逃げることはできないわ。
覚悟しなさい。

誰がこんないたずらをするのか、と腹立ちのあまり封筒と便箋をいっしょくたにして手の中で丸め込んだ。だが僕がここにいることを知っているのも監禁遊びのことを知っているのも石津だけのはずだ。石津がこんないたずらをするとは思えない。今の僕がこんないたずらを面白がるような状態ではないということも奴は承知しているはずだ。
では石津が誰かに話したのか？それも考え難い。僕がスキャンダルに巻き込まれる可能性は奴の利害にとって痛手以外の何物でもない。ならば、この女は本当にあの時の女なのか？あの女が嫌がらせか金目当てで僕にこんな手紙を出してきたのか？それにしても不明な点が残る。女は僕がここにいることをどうして知ったのか？一人で悩んでいても埒が明かないので石津に電話をかけることにした。
電話の置いてある居間の窓から外を見ると玄関先で音は聞こえて

いたのだが雨はどしゃ降りになっていて暴風に木々が喘いでいた。
僕は居間の電気を点けてK出版の石津のダイヤルインをコールした。呼び出し音が完全に鳴る前に石津の声が受話器越しに聞こえた。
「俺だ。牧野だ」
「おう、どうだ気分は？」
「こないだもいったけど、ここは最高だよ、スランプの作家にとっては」
「そうか。それはよかった」
「少しずつだが、回復しているような気になってきたよ」
「まぁ、無理しなくていいから。ゆっくり休んでくれ。だけどスランプのふりして、俺を出し抜いて、よその出版社の仕事をしやがったら許さねぇぞ」
「そんなこと俺がするわけないだろ。それに」
「なんだ？」
「俺がここにいるのを知ってるのはお前だけのはずだし」
「はずじゃないよ。俺だけだよ。うちの社長だって知らないよ」
「本当か？」
「どうしてそんなこと聞くんだ。誰かそこに来たのか？　どこの出版社の奴だ？　待てよ、ひょっとして写真誌の奴らか？」
「いや、違うんだ。誰も来てないよ、ただ」
「ただ、なんだ」
「手紙が来たんだ」
「手紙？　誰から？」
「あの女から」
「あの女って誰だ？」
「催眠術の」
「お前が監禁して遊んだ女のことといってんのか」
「俺だけが遊んだんじゃないじゃないか」
「バカヤロー、そんなことといってんじゃないんだよ。どうでもいいけど、これ、いたずら電話なのか？」

「どういう意味だよ？」
「死んだんだよ、あの女。あのあとすぐに」
「えっ」という僕の驚きの声が石津に聞こえたかどうか僕にはわからない。その瞬間に居間の電気が消え電話はプツリと切れた。受話器のむこうからは信号音すらも掻き消えてしまった。僕の耳には荒れ狂う暴風雨の音しか聞こえない。この嵐のせいで電気が停まり電話線が切れてしまったようだった。
薄暗い部屋の中で僕は立ちすくんでいた。
あの女が死んだのだとしたら僕の手の中にあるこの手紙は何だ。いったい誰がこの手紙を書いたんだ。いたずらまがいのファンレターには慣れている。剃刀入りのレターを不用意に開封して手を切ったことも何度かある。しかし、その方がまだましだ。こんな怪談じみた手紙は初めてだ。
何か行動を起こさなくてはいけない。
そう感じた。
この忌まわしい手紙を処分しなくてはならない。僕自身のためだけにではなく真理子のためにも。こんなオカルティックなものを真理子の目に触れさせてはならない。忌まわしいものの処分には火をもってするのが一番と思い立ち灰皿の中で丸めた手紙を焼いた。考えたからといって謎は解けそうもない。ならばなかったことにしよう。そうするにはこうするのが一番だ。謎は電話が繋がった時に石津が解いてくれるだろう。無理にでもそう思い込んだ。仕上げはこの忌まわしいものの燃え滓を嵐の中に捨ててしまうことだと合点した。嵐は、この忌まわしいものを散り散りばらばらに吹き飛ばしてくれるだろう。それは僕の心の中にわだかまった何かを散り散りばらばらにするための象徴的な行為のように思えた。燃え滓をビニール袋に詰め僕は傘もささずに嵐の中に飛び出した。傘をさしたところで濡れることから逃れられるような雨ではなかった。耳をつんざくような轟音とともに吹く風は森の木々の太い枝さえも折ってしまいそうな勢いで雨もその風が障害物に当たって方向を変えるのにつ

き合っていた。この忌まわしい手紙の燃え滓を散り散りばらばらにするには打ってつけの嵐ではないか。目を開けていられないほどの雨と風の中を僕は森を抜け例の池のあたりまでヨロヨロと歩いた。そして池にむかって燃え滓を撒き散らした。強烈な風がたちまち燃え滓を雲散霧消してくれた。

大きな仕事を一つ成し遂げたような気分だった。僕は大きな息を一つつき身体から興奮が徐々に退いていくのを自覚した。興奮の減退は嵐の中にいる身体の苦痛を思い起こさせ、それによって僕は幾分か冷静さを取り戻し、そのせいで新たな興奮を感じた。

出かけたままで帰らない真理子のことが気になり始めたのだ。こんな嵐の中、山道を車で走っているとしたら事故を起こしても不思議ではない。ついさっき捨て去ったはずの忌まわしいものが嵐の中で散り散りばらばらにならずに一つに固まって僕のもとに帰ってきそうな気分になるのを無理に押さえながら別荘に急いで戻った。

真理子はまだ帰っていなかった。

濡れた身体を拭くために直行した停電のままで暗い浴室でシャワーを浴びた。身体はすっかり冷えきって浴室から出ると震えがきた。震えをとめるためにウォッカをストレートで一杯飲み干した。その時、停電の備えなのか物置にランプが置かれていたのを思い出した。それを取り出して埃をはらった。二つあり、油も入っていたので一つに火を灯し、もう一つは妻用にいつでも使える状態にスタンバイしておいた。

何かしている間は気になることも忘れていられるのだが、することがなくなると悪いことばかり考えてしまう。真理子が帰らないのが益々心配になってくる。嵐も激しくなってきているように思えてくる。

僕に何ができる？ウォッカを重ねながら自問自答する。

電話が繋がっていないか確かめてみる。受話器のむこうからは何の音も聞こえない。諦めて待つしかない。待つ間、ウォッカを飲む以外に僕には何もすることがない。無色透明無臭の液体の中に僕は

逃げ込んでいく。ウォッカは僕の精神安定剤なのだ。ウォッカの強いアルコールが喉を痺れさせ熱いものが食道から胃へと流れ込むと僕は平安を得られるのだ。しかし、その日はウォッカの力も僕の精神に作用しない。逆に飲めば飲むほど神経が尖ってくるように感じられた。

あの手紙のせいだ。

この嵐のせいだ。

風の音、雨の音が轟音のように聞こえる。その音に交じって車のエンジン音が聞こえたような気がして耳をすました。

間違いない。

風雨の音をつんざくようにタイヤの軋む高い音が確かに聞こえた。僕が玄関に辿り着く前に荒々しくドアの開閉する音がした。

「大丈夫か」

真理子の顔色がこれまで以上に真っ青に見えて僕はそう尋ねた。

「山道を走ってたら、抜けられなくなっちゃうような気がしてきて、息が詰まりそうなほど胸苦しくて。誰かが森の奥から、お前はここから抜け出せないなんて語りかけてくるみたいで。頭はズキズキ痛んでくるし。そのうち本当に道に迷っちゃって」と一気に吐き出すようにそういうと真理子は玄関先でグッタリと座り込んでしまった。

「疲れてるんだよ。僕のせいで君には苦労をかけっぱなしだから。君の大嫌いな、こんな山奥にまでつき合わせてしまったし」

僕はそういいながら妻の肩を抱きかかえ立たせようとした。

「そういうつもりじゃなかったの。ごめんなさい。でも今日は休ませて」といった。

僕は居間から準備していたランプを灯して妻を寝室まで連れていった。

「電気つかないの？」

「停電みたいなんだ」

「どうして？」

「どうしてって、嵐のせいだろ」

「嵐なんて大嫌い」
「僕もだよ」
そういってキスをすると妻は少し安心したような表情になり着替えてベッドに入った。
新婚の頃から寝室は別にしていた。プロの作家になる前から僕は夜中に小説を書いていたし作家になってからは完全に生活が逆転してしまったから。もちろん僕の精神状態のせいもあったのだけれど習慣のせいだろう当たり前のようにここでも寝室は別にしていた。
妻が寝室に落ち着いてしまうと僕は漸く一息ついたような気がして居間に戻って再びウォッカを飲み始めた。今度はウォッカが身体の中に浸透し神経が落ち着いてくるのを感じた。そうすると、また、あの手紙のことが頭の中に忍び込んできた。
あの女。実は顔すらよく覚えていない。どこかで出会ってもおそらくわからない。あの件に関しては興奮の記憶しかない。石津は女に催眠術をかけるのを見せて、何でもいうことを聞くから好きなことをしてもいいと、あの時、僕にいったが、かなり後になってからだが催眠術っていうのは嘘だったんじゃないのか、と僕は少し疑い始めた。金をつかませて演技させただけじゃないのかと。
しかし、演技だろうが何だろうが、すぐにノーマルなセックスに飽きて一週間で百回以上は縛って身動きできなくさせた女の顔や腹を拳骨や鞭で殴った。女は何度も気を失った。気を失うと鼻をつまんでウォッカの壜を口に突っ込み女がむせて意識を取り戻すと、また殴った。殴り疲れるとそのままセックスし、ウォッカの壜や思いつく限りのものを女の性器に突っ込んだり蝋燭の蝋を身体中にたらしたりして、女の苦痛の表情を楽しんだ。僕は自分が飽きると石津に同じことをさせた。石津がそうするのを見て僕は自分がするのと別の興奮も覚えた。僕たちは、その一週間ハイでい続けるために覚醒剤を使った。石津が絶対にこれだけはこれっきりだぞと念を押して射ってくれたのだった。おかげで疲れを感じずに遊び続けられた。女には一週間、水とウォッカしか与えなかった。女が衰弱していく

のを見るのも楽しみだった。
そんな回想をしながら僕はかなりのウォッカを飲んだ。チェイサー代わりにビールが飲みたくなって停電で用を果たしていない冷蔵庫から缶ビールを取り出した時、妻の寝室の方から叫び声が聞こえてきた。
相変わらず嵐による風雨の轟音が別荘全体を包んではいたが、はっきりと妻の叫び声が聞こえる。
僕は妻の寝室へ急いだ。
妻の叫びが誰かと言い争っているようなので寝室の前で僕は思わず立ち止まってしまった。
「嘘、嘘よ。あたしの夫はそんな人じゃないわ」
「夫は絶対にあたしを裏切ったりしないわ」
「嘘よ、嘘。あなたは人違いをしてるのよ」
僕は妻のその声に聞き入っていた。
誰にむかって彼女は僕のことを弁護しているつもりなのだろう。
その時、寝室のドアが開いた。
真理子が立っていた。
「どうしたの。どうしてこんなところに立ってるの」
僕の驚いた顔を見て妻がそういった。
「いや、何だかうなされてたみたいだから」
「とても嫌な夢を見たの」
「気分はどう？」
「頭が痛いの。きっとそのせいよ、うなされたのは」
「どんな夢だったんだい？」
「とてもとても嫌な夢。思い出したくもないわ」
その後、真理子は大人しく眠ったようだった。僕は居間に戻ってグデングデンに酔っ払うまでウォッカを重ね知らぬ間に居間のソファーで眠ってしまった。
目が覚めた時どれほど眠ったのか自分では判断できなかった。す

ぐ目覚めたようにも感じるし、かなりよく眠ったような気もした。
嵐はまだ続いていて部屋の中も暗く時計を見なければ時間もわからなかった。何も食べずにウォッカをガブ飲みしたせいで頭は痛むし胸のむかつきも激しかったが真理子のことが気になって寝室にむかった。
寝室のドアは開いていて妻はそこにいなかった。寝室の掛け時計は八時を差していた。夜の八時なのか朝の八時なのか僕にはわからなかった。朝の八時だったとしたら僕はどれほど長時間、眠っていたのだろう。
「真理子」と妻の名前を呼びながら僕は嵐の中を玄関から飛び出した。
玄関の前に停められた車の運転席に真理子はいた。運転席のそばに寄っていってウインドウを叩くと妻はやっと僕に気づいたようで車から降りて僕の胸に顔を埋めた。
「どうしたんだ」
「バッテリーが上がっちゃったみたいなの。スモールランプを消し忘れてたみたい」
真理子は暗い顔でそういった。
「どこかに行こうとしてたのか？」
「どこかに行けることを確認したかったの」
「どういう意味？」
「ここに監禁されてるような気がして」
「監禁？」
「こんなとこでもＪＡＦって来てくれるのかしら」
「嵐がやめば来てくれるだろう」
「石津さんなら嵐でも来てくれるんじゃない」
「連絡ができないんだ」
「どういうこと？」
真理子の真っ青な顔から更に血の気が退き真っ白になった。
「電話が通じないんだ。嵐のせいで回線が切れたんだろう」

真理子は僕のその言葉を聞くや脱兎のごとく家の中に駆け込んだ。僕も彼女を追った。彼女は居間で受話器を耳にあてて狂ったようにプッシュホンを押しまくっている。何度も電話のフックを乱暴に叩いては何度も何度も繰り返しプッシュホンの回線を繋げようとしている。彼女の額には冷汗が滲んでいる。眼は何かに憑かれたかのごとく大きく見開かれたままだ。こんな真理子を見たのは初めてだ。こんなに取り乱したわが妻を。

そしてヒステリックな叫び声を上げたかと思うと受話器を投げ出して自分の寝室にむかって駆け出した。

後を追った僕が「真理子」と呼びながら寝室のドアを開けようとすると、

「入らないで！」と拒絶する。

「どうしたんだ」と尋ねたが「とにかく、ほっておいて」の一点張りだ。暫らく寝室に入ろうと押問答を繰り返したが彼女を興奮させる効果しかなさそうなので諦めた。しかし寝室の前からは離れずにいた。最初は彼女の嗚咽のような呻き声が聞こえていたが、ほどなく落ち着いたのかそれはやんだ。それからは物音一つ聞こえなくなった。眠ってしまったのかもしれない。

寝室を覗いて彼女の様子を窺おうかと思った。しかし、もし眠っていなかったら、また興奮させてしまうかもしれない。そっとしておく方がいいかもしれない。そっと。

できるだけ音をたてないように気遣って僕は居間に戻った。居間のテーブルにはウォッカの壜とグラスが置かれたままだ。僕はまたそれを飲み出す。頭痛もむかつきも治まってはいなかったが、ほかに何をすればいい。

そういえばウォッカを飲むばかりで、かなり長い時間、食事もしていない。そのせいもあるのだろう。アルコールは一気呵成に僕の身体を駆け巡り脳をも刺激し始める。

僕は、こんな生活をしてまでスランプを抜け出さねばならないのか。これまでに書いた作品の印税で一生暮らすのにも困らないので

はないか。ちゃんとした小説が書けなくてもホラー小説に関する評論や書評などの小文を書いても金にはなる。ほとんどまともな小説を書かず、その手の雑文だけで作家と称して飯を食っている輩だっていくらでもいるじゃないか。

そうだ。嵐がやんだら、もう帰ろう。僕はそう決意した。あの女の手紙のことだって帰ったら忘れるだろう。いや、そもそも石津の言葉を僕が聞き違えただけかもしれないじゃないか。この件については石津がきっと納得のいく解決をつけてくれるはずだ。

この決意はすぐにでも真理子に伝えてやらねばと思った。彼女を安心させるためにも。アルコールの力が僕の気持ちを強く後押ししていた。真理子が眠っていてもかまうものか。起こしてでも伝えるべきことだ。妻がまた悪い夢を見ないですむように。

そう思うと矢も楯もたまらなくなって妻の寝室にむかい、迷うことなくドアを開けて押し入った。

その途端、

「あなたには絶対に負けないわ！」

と僕には全く気づかない様子の真理子がベッドに腰掛けて宙を見つめて誰かにむかって叫んだ。その叫び声は僕を無視してさらに続けられた。

「負けるもんですか。あなたには絶対負けないわ！」

「もし万が一、あなたのいう通りだったとしても、あなただってお金が欲しかったわけでしょう」

僕は、ほっておくと妻の興奮状態が永遠に続くのではないかと心配になり、彼女の肩を両手で強く握って力一杯揺すぶった。

「どうしたんだ、真理子、落ち着け！」

突然、真理子は息を飲んで僕を認めるや僕の首にすがりつき、こういった。

「あたし、邪悪な、とっても邪悪な霊に取りつかれたみたいなの」

「邪悪な霊？」

「そうなの。その霊はあなたにひどいことをされたせいで自分は死

んだんだっていうの。だからあたしに取りつくんだって。あたしの心をコントロールして、あたしにあなたを殺させようとしているの。あなたへの復讐だって、そういうの」
「だ、誰が君に僕を殺させようとしているって」
「あなたが監禁して遊んだ女だっていってるわ。覚えがある？　あなた」
「な、ないよ。そんなの」
「嘘よね。そうよね」
「あ、ああ、当然さ」
「じゃあ、やっぱり邪悪な霊の邪悪な企みなんだわ。でも……」
「でも、何？」
「負けたらどうしょう」
「負けたらって」
「もし、もし、あたしがその女の霊に負けたら」
「君が僕を殺すっていうの？」
「そう。そうよ。あの女の霊はあたしにそうするように仕向けてるんだから」
「君に殺されるんならかまわないさ」
「本当に。本気でそういってくれてるの」
「本気さ」
「そこまで、あなたがそこまでいってくれるのなら、勇気を持ってあの女と闘えるわ、あたし。絶対に、あの女には負けないわ。あなたのことを信じられるうちは絶対に負けないわ、あたし」
　そして真理子は霊と闘うことが如何に辛いことであるかを涙ながらに訴えた。肩を震わせる妻を抱き締めて僕はこういった。
「疲れてるんだよ。もういいんだ。もう帰ろう。君はここにむいてないんだ。僕のスランプのことなんて気にしないでいい。そんなことはどうでもいい。僕はもう大丈夫だから心配しなくていいんだ」
妻はしゃくり上げながら僕の顔を弱々しく見て「本当に大丈夫なの？」といった。

「平気だ。もう本当に平気だ」
「正直いって、あたし、帰るのもちょっと恐いわ」
しかし真理子は暫らく抱き締めてやっているうちに落ち着いてきたのでベッドに横にさせた。そのまま手を握ってやっていると小さく寝息をたて始めた。
真理子を落ち着かせたことと、この別荘地を去る決意をしたことで、僕自身も安心してしまった。
実際には、あの女の手紙と真理子に取りつこうとしている霊の話が奇妙なまでに一致し、しかもそのバックにあるのが自身の逃れようもない現実であることすら僕は忘れようとしていた。ここから、この別荘地から離れさえすれば何事もなかったことになるという気分になっていた。もう僕の現実処理能力の限界を超えてしまっていたのだろう。僕の頭は処理機能を失ってしまってエラー表示を点滅させることしかできなくなっていた。全てをこの別荘地のせいにすることによって全ての嫌なことを忘れようとしていたのだ。そもそもこの別荘地に来る原因となった自分のスランプのことも都合よく含めて。
安心は全身にウォッカを回らせ僕は突然ストンと穴に落ち込むような酔いを自覚した。それは僕にとって久々の気持ちのいい酔い方で眼を開けていられないほどの睡魔が猛然と襲ってきた。自分の寝室に入って倒れこむように眠りに落ちた。

どれくらい眠ったのかは定かではない。意識は朦朧としているがベッドの脇に誰か人のいる気配を感じる。振り返って見ようと思うのだが身体が動かない。
「真理子か？」
そういおうとする声もでない。
その誰かが近づいてくる。僕の身体を覆っている毛布の足元に誰かの手がかかった。足元から毛布がゆっくりとまくられていく。
僕は必死に身体を動かそうとするが身体は金縛りにあっていて動

かない。声もでない。
毛布は足元から腰のあたりまでまくられた。
僕は必死で身体を動かそうとする。
毛布は徐々にまくられていく。腰から胸のあたりへ。胸から。毛布が全てまくり上げられる直前に僕は目をつぶった。
僕の目の前に誰かいる。確かにいる。それは気配でわかる。
僕は思い切って目を開けた。
ギョッとした。
思い出した。
あの監禁した女の顔を。
その女が確かに僕の目の前にいた。
僕は嫌なものを見たくない一心で再び目をかたく閉じた。長い時間、そう感じられた。
僕の顔のすぐ前に、息がかからないのが不思議なほどの距離に、あの女の顔がある。
僕はかたく目を閉じたまま女が動く気配を少しでも察知しようと全神経を自分の顔の前に集中している。長い長い時間が、ゆっくりとゆっくりと過ぎていく。
と、突然、雷鳴が鳴り響く音が聞こえた。
それまで僕の耳には何の音も聞こえてはいなかったので心臓が止まるかと思ったほど驚いた。同時に、目の前の女の激しい息遣いを僕の頬と耳が感じた。
ハァハァハァハァハァハァハァハァ……。
何かが変わった。
女が何かを僕にしようとしている。
それは僕への復讐以外の何かではないだろう。僕は勇気をふりしぼって目を開けた。
息がつまるかと思った。
目の前に真理子がいた。僕の胸を目がけて包丁を振り上げている真理子がいた。

僕がそれを認知した途端に真理子の包丁が降り下ろされてくる。その包丁の動きがスローモーションのようによく見えた。僕は必死の思いで身体を動かそうとした。包丁はベッドのシーツを突き刺した。僕の身体はベッドの反対側の壁とベッドの間に背中から落ち込んでいた。

そこからは真理子は見えない。真理子の激しい息遣いだけが聞こえる。

ハァハァハァハァハァハァハァハァ……。

それが再び僕の方に近づいてくる。

僕は身体を徐々に、音をさせないように立て直す。見えない真理子の息遣いで真理子との距離を測りながら。真理子がベッドの上から僕の落ち込んだ壁際にむかって来るのがわかる。僕は真理子が襲ってくる瞬間にベッドの足の方から飛び出そうと身構える。

真理子の息遣いが、どんどん近づいてくる。

ハァハァハァハァハァハァハァハァ……。

僕はすぐにでも飛び出したい気持ちを押さえている。

息遣いが、すぐ、そこに。

今だ！

と、床を蹴って、ベッドの足元から身体を投げ出す。その勢いで身体を一回転させて立ち上がった。

真正面に、真理子が立っていて、ニヤリと笑った。

頭上高く振り上げられていた包丁が僕の頭を狙っていた。包丁が僕の頭にむかって降り下ろされてくるように僕の意識もどこかに落ち込んでいこうとしたその瞬間、寝室のドアがバタンと音を立てて石津が飛び込んできた。

その音のせいで真理子は包丁の動きを止めた。

僕は必死で石津のもとに駆け寄った。

助かった、と安堵の思いで石津に抱きつこうとした。

その時、僕は更に深い奈落へ落とされた。

僕のこめかみに石津の拳が打ちすえられたのだ。僕は床に転がっ

た。打撃のショックは強烈だった。が、精神的なパニックには及びもしなかった。何が起こったのか、よく呑み込めなかった。突然の衝撃と動揺のために朦朧としている頭を何度か振って顔を上げた時、僕は全てを理解した。ホラー小説の恐怖ではない現実的な恐怖が最高潮に達した。

真理子が手にしていた包丁を掴んだ石津が僕に迫ってきていた。包丁の刃の部分を掌にペタッペタッと打ちつけながら。ニヤニヤ笑いながら。ゆっくりと。

後に真理子を従えて。

3

例のシティホテルの地下の一室に罐詰になっている。原稿はかなり捗っている。もう一ヵ月近く書き続けて第一稿はほぼ完成に近づいている。僕は第一稿をそのまま作品とするタイプの作家ではない。そこからの推敲が僕の持味といえるだろう。そのことを一番よく知っているのが仕事の上での僕の一番の理解者である石津と生活のパートナーであり自分も学生時代にホラー小説を書いていた真理子だった。

今度の作品は霊感の強い妻が悪霊に取りつかれて夫を襲うというストーリーだ。僕は現実に体験した恐怖を一心不乱に書いた。

あの日、僕は、あの別荘での、あの瞬間、てっきり妻の真理子と石津が僕の知らない間にできてしまって邪魔になった僕を殺そうとしたのだと思い込んだ。しかし包丁を手にして寝室の床に転がって震えている僕に近づいてきた石津はこういったのだった。

「じゃあ、そろそろ原稿を書いてもらおうか」

僕は石津のいっていることがよく理解できなかった。呆然としている僕を見て石津は自分の背後にいる真理子に、

「もうばらしてもいいよな」といった。

僕は恐る恐る真理子を見た。真理子は僕と目が合うとバツの悪そうな顔をして、
「ゴメンなさい、あなた」といった。
ゴメンなさいってどういう意味だ。僕は声には出さなかったが、そんな表情をしていたのだろう。石津がこういった。
「これは、お前をスランプから救うための荒療治だったんだ」
「荒療治？」
「そうだ。全部、俺と真理子さんが仕組んだ芝居だ」
「芝居だって」
僕はそういって絶句した。
あまりにもひどいじゃないか。僕をいったい何だと思ってるんだ。それも言葉にはならなかったが石津には僕がそういいたいのがわかったようだった。
「お前の気持ちはわかる。冗談にもほどがあるっていいたいだろうよ。でも、俺たちは真剣だったんだ。お前のスランプには、こういうショック療法がよく効くってことを知ってるからさ」
「どうしてそんなことわかるんだ」
僕がそういうと石津はチラッと真理子の方を見て「まぁいいか」てな表情をして、こういった。
「お前のひどいスランプってこれで二回目なんだぜ」
「二回目？」
「そうだ。一回目は監禁遊びをした時だ」
「あの時、俺、スランプだったのか？」
「お前、原稿書いてたか？　遊んでばっかりいたんじゃねぇか。よく思い出してみろ」
全然気づいてなかったが、そういわれればそうかもしれない。女遊びに耽ってばかりいた記憶しかない。作品も『監禁』の前作からかなり長い間発表していない。
「あの時も真理子さんの発案で二人であれを仕組んだんだ」
「今度も真理子の発案なのか？」

僕はそういいながら真理子の方を見た。
「ゴメンなさい」
真理子はそういって下をむいた。
「まぁ、でも、もうこれが最後だ。俺もお前ももう若くはなくなってきたし、今度スランプになったら自分で立ち直ってくれよ」と石津が僕と真理子の間をとりなすようにいった。
僕は二度と、もう二度と、スランプになんかなりたくないと思った。

その作品『妻が襲う』は『監禁』と並ぶ僕の代表作となった。
次のスランプは『妻が襲う』を書き上げるとすぐにやってきた。
もう石津も真理子も僕に荒療治をしようとはしなかった。
僕の才能は大したものではなかったのだ。
それでも作家『牧野慧』の作品は、その後も出版され続けた。真理子が書いた第一稿を僕が綿密に推敲するという形で。
思えば、それまでもずっと、僕は真理子に与えられたプロットを自分の作品であるかのごとく錯覚していただけなのだ。真理子が霊波の合った僕を気づかぬうちにコントロールして作品を書かせていたのだ。本当の『牧野慧』は真理子だったのだ。
当初、僕はこの事実に苦しんだが今ではもう気にしてはいない。ただ、真理子がスランプに陥るのを楽しみに待っている。
真理子がスランプに陥った時の荒療治について、もう石津と綿密な打ち合せがしてあるから。

〈了　〉

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4367i/

妻が襲う

2010年10月8日15時31分発行